

優秀賞

テーマ：医療と福祉、わたしの体験 「介護する側、される側」

東京都・大妻中学高等学校2年 横本彩耶香

祖父は、私が生まれるよりずっと前に倒れ、一十八年間重度一級の寝たきり生活を送った末、昨年十一月に亡くなった。

話す事は勿論、右手を少しだけ動かせる以外は全身全く動かず、祖母はそんな祖父を二十八年間もずっと介護してきた。胃瘻で、流動食は家族以外だと看護師の資格がないと出来ない法律なのでヘルパーさんを頼んでも、食事の時間には必ず祖母が戻らなければならない。ショートステイでも土日は胃瘻の為、預かってはもらえないでの、祖母は二十八年間、一度も土日に介護から離れたことはない。

そんな二人の姿も小さい頃の私にとっては何の迷いも疑問もなく当たり前の事だった。小学校に入ると少しずつ祖父母の事を考えるようになつた。「美味しい！」と言いながらご飯を食べている時、大声で笑いながら遊んでいる時、ふと、「今、私は楽しいけど、おじいちゃんはどう思つて居るのかな」と。

祖父母の家に泊まり、たまたま早くに田が覚めたある朝、寝ぼけまなこに飛び込んできたのは、まだ四時にも関わらず祖父のお世話をする祖母の姿だった。私はこの時初めて介護の現実を知り、この日を境に皆の大変さを考えるようになった。毎朝一時間もかけて、歯の一本一本、指の間、爪の間、耳と体の隅々まで拭いていた。胃瘻なのに口からも食べさせてあげたいと、赤ちゃんより大変でほとんどの口からこぼれてしまつのに毎回毎回一時間かけて水羊かん一つを食べさせてあげ、最後まで床ずれ一つ作らずに介護していた。

もし私が祖母の立場だったらと考へると、自分の好きな人の為に介護はしたいが、そう簡単にはいかないと思う。自分の時間の大部を割かなくてはならないし、精神的にも肉体的にも重労働。楽しんでいる時でさえも頭の中にはいつでもその人がいると思う。それでも祖母

からは弱音や嫌だという言葉を一度も聞いた事がない。それは私には真似できない事だ。

しかし、祖父母はたまに言い争いをしていた。言い争いといつても祖父はしゃべないので「おーおー」と全身の力を振り絞つて大きな声を出し、怒りをぶつけるだけ。私は「こんなにお世話をしてくれるおばあちゃんをどうして怒るのだろう」と不思議で祖母がかわいそうだと思っていた。でも祖父も同じくらい、いやそれ以上に辛かつたはず。お世話をしてもらつて、事に対する感謝や申し訳なさと共に、自分で何も出来ない事への苛立ちや、やりきれないさも沢山あつただろう。美味しそうな匂いがしても、言いたいことがあっても叶わない。毎日同じ景色。二十八年間。

アウトプットは出来ない祖父の頭は最期までしつかりしていた。ヘルパーさんは重度の為も分かつていないと思つて祖父を扱う。家族がいる時といない時とで態度が大きく変わつたり、心無い接し方をしたり。また一方、一生懸命に介護して下さる方もいる。人それぞれ。ここにも介護の難しさがある。「五十音ボード」をぶれながらもゆつくり指さしては、今日のヘルパーさんはどうだつたか、という事を祖母に訴えていた祖父の姿が印象的で悲しく映つた。私の為に気遣いさえしてくれる祖父だった。

今日、介護に疲れ殺してしまつ事件や自殺を耳にする。どんな事があつても人を殺める事はいけない事。だがしかし、介護を間近で見てきた私には、単純に殺してしまつ方が悪いとも思えない。祖母の四十六～七十四歳までは介護の人生だった。家族や周りの人の関わりが、一番の支えであり、重要だ。自分と同じくらい他人を思いやる気持ち、社会全体が周りに優しくなる事、そして法の整備などがまだまだ必要だ。

誰も自分一人では生まれてくる事も、生きる事も、そして笑う事すらできないのだから…。